

Key
Person



(株) R.K 工業 代表取締役

小高一樹

特に深く考えることもなく、知人の紹介で始めた鳶の仕事。
それでも続けるうち、次第に技術が身についていき、
気付けば鳶だけが自分の生きる道、唯一無二の「天職」へと変わっていた——。
そんな自身の歩みを語ったのは、埼玉・東京で活躍する『R.K 工業』の小高社長だ。
「私は鳶しか知らないですし、他のことはできないんです」。
その言葉通り、脇目も振らず、ただ一筋に歩み続けてきた社長だからこそ、
他社には負けない鳶工事の高い技術力を手にするに至っているのだろう。
「鳶」を極める——そんな高みを目指して、社長は真っ直ぐに飛躍を続けている。

「鳶職人は私にとっての天職。
この道をただ一筋に貫き、極めたいです」

高い技術力で埼玉・東京を席卷！ 飛躍を続ける鳶職人集団

COMPANY PROFILE

株式会社 R.K 工業

埼玉県所沢市花園 1-2417-2
トランヴェール 308



「R.K工業」の経理を担当する、小高社長の奥様・真由さん（左）と、小高社長（中）と、真由さん（右）を交えて

Special Interview

埼玉県所沢市に拠点を構え、足場工事一式を手掛ける「R.K工業」。確かな仕事を実現する技術力の高さ、あらゆる現場を渡り歩くフットワークの軽さで評判を集め、創業から5年、順調に業績を伸ばしている。本日は、そんな同社を牽引する小高社長のもとを、タレントの黒田アーサー氏が訪問。社長を公私共に支える奥様の真由さんも交え、対談を行った。

独立前の苦境を支えた 奥様との運命的な出会い

——「R.K工業」さんでは足場工事、いわゆる「鳶」のお仕事を手掛けられているそうですね。小高社長は早くから、鳶職人になられたのですか。

(一) ええ。知人の紹介で、中学卒業後すぐに始めました。これまで鳶一筋を貫き、もう17年になりますね。

——まだお若いのに、経験豊富でいらっしゃる！ 独立にはどのような経緯が？

(一) 最初に入った会社では10年以上働き、社長に次ぐ二番手の立場にもなっていました。しかし、ある時から会社の経営が上手くいかず、給料がもらえなくなりまして……。お世話になった社長ではありましたが、最終的には喧嘩別れすることとなり、27歳の時に独立したんです。余談ですが、元々同級生だった妻とは、その前職時代、現場に向かう電車の中でたまたま再会しましてね。それがきっかけで、後に結婚したんです。普段、私は車移動しかしないのですが、その時

はお金がなく車も持っていなかったもので、仕方なく電車に乗っていました。改めて考えると、本当に偶然の再会だったと思いますね。

——まさに運命的な馴れ初めですね！

(一) とはいえ、当時の私は所持金・貯金ゼロ、車なし、家賃も払えない……。そんな状況でした。ですから、妻にはとても迷惑を掛けましたし、本当に頭が上がりませんよ。

(真) 主人が一生懸命に仕事をしていて、それでもお給料がもらえないという事情は、私も聞いていました。だから当時は「いつか私を幸せにして」と言っていたんですよ。そして今は、あの時の分を取り返しているところなんです（笑）。もうとっくに、貸した分以上のものを返してもらっていますけれど。

——社長のことを信じた奥様の目は正しかったわけだ。しかし、それだけ苦しい状況に陥る前に、独立や転職は考えられなかったのでしょうか。

(一) もちろん考えました。ただ、その時は手掛けている最中の現場があったんですよ。やっぱり会社や取引先は裏切れませんし、最後はビシッと決めたいじゃないですか。ですから、現場を全て終えるまでやり抜き、それから退職しました。

代表取締役 小高一樹

埼玉県狭山市出身。中学卒業後、鳶職人の世界に飛び込み、勤務先で10年以上にわたり修業を積む。2013年に個人事業主として独立すると、翌2014年には法人化して「R.K工業」を設立。現在に至る。



たゆまぬ努力、技術の研鑽で 他社を上回る“神”な仕事を実現

——では、独立された当ても資金のない状況だったのですか。

(一) ええ。全くのゼロからのスタートでした。最初は個人事業主として、知人がいる現場の手伝いから始めましたね。それでも仕事をこなしていくうち、どんどんと事業が成長し、人員も増えていったんです。2014年には法人化を果たすことができ、今は10名の従業員がいて、中にはベトナム人の従業員もいますね。これほど順調にこられるとは思っておらず、自分でも驚いているぐらいです。

(真) 最初の1年ほど、主人は本当に休みなく働いていました。家に帰ってくるのは、1～2時間の仮眠やお風呂のためだけ。朝から晩まで働き通しで、土日や祝日もなかったです。

——そんな努力の積み重ねによって、今の成功があるのでしょね。

(真) ただ、そんな忙しい中でも主人は、お金もないのに従業員に日払いや週払いで給料を払ったり、呑みに連れていったりしていたんです。経理も担当する私の感覚では、何でそんなことができるのか、不思議で仕方ありませんでした（笑）。

(一) 何も言えませんね（笑）。ただ、彼らなくして当社はありせんから、従業員を大切にしたいという想いは強いんですよ。それに、とにかく仕事を一生懸命に続けていけば、「どうにかなる」という考えもあったんです。

——それだけ腕にも自信をお持ちだと。

(一) ええ。自分で言うのも変ですが、埼玉・東京の鳶業界、とりわけ足場の回収において、当社は他社に負けない“神”な仕事をしていると思っています（笑）。——神ですか（笑）！ どんな業界でも、そこまで言い切れる方は少ないと思いますから、本当に良いお仕事をされるのでしょうか。そんな社長が考える「鳶」の魅力、ぜひ伺いたいです。

(一) 疲れるし、重いし、夏は暑いし、

冬は寒いし……。あまり良いところはないかもしれません（笑）。ただ、私には鳶しかありませんから、それならこの道を極めようと、その一心で仕事を続けてきました。きっとこの仕事、私の天職なんだらうと思います。

——言葉では言い表せられないような、肌で感じる職人としてのやり甲斐があるのでしょうか。お話を聞きませんが、最後に今後の展望をお聞かせ下さい。

(一) 従業員に給料をちゃんと渡せるか、作業中に怪我が起きないか……。日々そんな心配ばかりですし、先のことは全く見えません。ただ、将来的に会社から離れた時には、妻と二人で田舎にでも引っ越し、のんびり暮らしたいですね。

（取材／2017年7月）

Column

対談に同席した奥様曰く、小高社長は学生時代から人一倍、運動神経が優れていたという。どんなスポーツもやればすぐに上達し、野球部に所属した中学時代は、4番ピッチャー、キャプテンを兼任。学業修了後に仕事の傍ら始めたアームレスリングでは、21歳以下の大会で日本一となり、年齢制限のない大会でも全国3位まで上り詰めたという。野球もアームレスリングも、長く続けていけば大成する可能性もあっただろう。しかし、「ある程度のレベルまでいけば、もういいかな」と思ってしまう」と、社長はあっけらかんと語る。

そんな熱しやすく冷めやすい社長が唯一、ずっと続けてきたのが「鳶」の仕事だ。「本人も言っていますが、私から見ても主人は鳶の仕事が天職だと思います」と、社長を傍で見続けてきた奥様も言う。道一筋に歩み、磨き抜いてきた鳶の技術——それこそが、社長が埼玉・東京の鳶業界で飛躍的な躍進を果たしている要因に違いない。



After the Interview

「ご自身のお仕事に確たる自信をお持ちの小高社長。並々ならぬ努力を重ねられてきた証でもあると思いますし、そのお仕事に対するプライドとプロ意識が素晴らしいと感じました。そして、献身的に支え続けてこられた奥様の存在も、今の社長を形作る上では欠かせない存在だったことでしょう。苦楽を共にし、固い絆で結ばれたお二人なら、これからも手を携え合いながら永らく事業を続けられると思います。今後のさらなるご活躍を応援しています！」